琴線の絆

３年ほど前、魂を揺さぶられた一本の新聞記事がありました。

平成22年の大みそか、日本海に面した国道９号で、記録的な大雪によってスリップした大型タンクローリーが道路をふさぎ、25㎞にわたって千台の車が立ち往生。記事は、そのとき車列に向き合った鳥取県琴浦町の沿線住民たちの、いつもと違うお正月の姿を追ったものでした。

新年の幕開けを皆が祝っていたころ、動けない千台のドライバーたちは、過酷な夜に耐えていました。腰まで積もった大雪と極寒の路上ではトイレもままならず、服装が十分でない中、ガソリン不足で暖房を付けられない車もありました。

未明にそれを知った町の住民は、すぐさま立ち上がります。互いに連絡を取り合って、正月返上での見事な連携プレーが始まりました。仕事場のトイレを開放して即席の看板で誘導したり、赤ちゃん連れの母親を見つけるとミルク用のお湯と毛布を手渡したり。消防団員は１台ずつ車に声を掛けて回り、女性たちはありったけのお米を炊いて握ったおにぎりを、汗だくになって配り歩きました。

「目の前に困っている人がいたら、お互い様じゃけね」

国道沿いのまんじゅう店は、1,200個のまんじゅうを自ら配ったといいます。

読み進むにつれ、住民の人情と心意気が強く心に響きました。沿線住民が誰に言われることもなく、献身的な活躍で見ず知らずの人々を救うという情景に、忘れかけていた日本人の気概がよみがえったからです。

琴浦では、これまでにも難破船が漂着するたびに、住民総出で船員の救助に当たってきたといいます。

「琴浦は、そんな土地柄です」

まんじゅう店の店主の一言は、何と多くの示唆を与えていることでしょう。

この年の３月、あの東日本大震災が列島を襲い、未曽有の大災害をもたらしました。おびただしい犠牲者の数と更地がはるか海岸まで続く光景。千年に一度といわれた震災の傷跡はあまりに

も大きく、文字どおり日本中が震え上がりました。在りし時の日常を、無言で伝える痕跡の数々。耐え難い悲しみと限りない絶望感が、被災地を包み込んでいきました。

それでも人々は、悲しみを懸命にこらえ、乗り越えて、再び歩み始めました。そして、その不撓不屈※1の精神に、国中から温かい支援の手が差し伸べられました。国を挙げて響き合う被災地支援の声、声、声。日本人は、この深刻な試練を通して、かけがえのない「絆」を取り戻したのです。

人と人との離れ難いつながり。震災や大事故が起こるたびにこうした絆が注目されるのは、ある意味残念なことなのかも知れません。ネット社会になり便利になった現代ですが、快適さと引き換えに、何か疎遠で人情に薄い世の中を生きているように感じます。

古来、地域の「であい」など相互扶助や助け合いの精神は、日本中にあふれていました。皆が当然のように助け合いながら生きてきたのです。そして、そんな日本人の気概は、現代の私たちにもきっと受け継がれているはずなのです。

いつかまた、琴浦の国道上で繰り広げられた助け合いの情景が日本各地で見られるようになれば、こんな当たり前の話題は記事にはならないのかもしれません。日本人が気概を取り戻した今、「琴線※2の絆」が私たちの心でどんどんつながって、引き継がれていくことを願ってやみません。

※１
不撓不屈…どんな困難にあっても決して心がくじけないこと
※２
琴線…心の奥深くにある、物事に感動・共鳴しやすい感情を琴の糸に例えた言葉